

〈研究ノート〉

デザインの人類学と多元感覚人類学が繋がる

新たな人類学的課題の探求

—オーストラリア先住民のメッセージ・スティックから、
心理歴史誌的文化療法まで—

宮坂 敬造

Abstract

A Research Note on the Significance of Exploring the Possibility for Combining Design Anthropology and Multisensory Anthropology: From Cultural Anthropological Studies on Australian Aboriginal Message Sticks to Sensory Orientation in Design

Anthropology, titled as such, in pursuit of the further possibility for combining design anthropology and multisensory anthropology, this working paper initially focuses on a brief history of the author's exposure to studies by architectural anthropologists and secondly on his research on paintings of Australian Aborigines which led to his renewed interest in their traditional message sticks inherently related to design anthropology. A set of analytical terms such as style, design, decoration in art historical studies for the sake of cross-referencing over design anthropological concepts of design and its shift in meaning over history, the author prepared original discussions on the possibility for combining design anthropology and multisensory anthropology partly in connection to ontological turn in anthropology. The author, Keizo Miyasaka, prof. of anthropology, Tokyo Tsushin University, finally focuses on its possible application towards making a special study of psychohistoriographic cultural therapy as developed by the late Frederick Hickling M.D. at the University of West Indies, and its experiential sessions.

Key Words: anthropology of design, anthropology for design, multisensory anthropology, message sticks used by Australian Aborigines, psychohistoriographic cultural therapy

1. はじめに

本稿はデザイン人類学と感覚の人類学を結びつける研究の展開のための準備の序章としての研究ノートである。この領域は、世界的に広がる人類学主要学会の動向を見ても、まだ発生当の初段階にあると思われる。従って体系的な検討に入る準備として、本稿は一人類学会の動向を踏まえつつも—研究構想に関わる発想に関するノートを含んでいる点で、探索的な研究のノートであることをまず述べておきたい。

人類学の領域からデザインを扱う研究関心をむける直接の端緒は、筆者の場合、オーストラリア先住民の絵画についての短期調査の機会に発している。

とはいえ、その少し前の2006年2月、建築家であり、かつ民族学者でもある研究者と出会い、建築デザインと文化人類学が融合する研究例にふれたことが、そもそものきっかけとなった。デザインの人類学的研究方向のひとつの代表例に具体的にふれる端緒機会となったのである。— 前任校での21世紀COE研究「心の解明に向けての統合的方法論構築」の表象B班メンバーとしてスイス・イタリアの大学やアールブリュット美術館を訪問したおりに、建築家であり、かつ民族学者（人類学者）でもあるNold Egenter教授と、筆者の友人のPaul Bouissac トロント大学名誉教授の紹介メールによってお会いできたのである。さらに、建築系教育研究で世界的に知られるSwiss Federal Institute of Technology in Lausanneを訪問し、スタッフの建築家たちとも交流し、スイス人研究者による日本建築デザイン研究のお話しも聞くことができた。Egenter教授は、京都大学研究員として、1979~80年に1年間、日本に滞在していた—アイヌの民俗建築や日本各地の農村の家屋や農耕関係の用具や稲刈りにともなう稲藁の束の作り方、神社とその周囲の景観の短期の調査を、滞日中に重ね、建築学からのデザインの視点と記号学分析を組み合わせせて検討していた。その成果として、日本の伝統的建築と民俗用具、景観について研究書を著している¹。

建築家が後に文化人類学を学び、民族の伝統文化的パターンが内在する民間建築を文化とデザインの観点から研究する方向が散見されていたが、K. M. Murphy (2016年) がレビュー論文「デザインと人類学」で指摘するように、デザイン人類学の三つの潮流のうちの一つである〈デザイン的人类学〉を彩る流れの中で、Egenter教授が手掛けた民間建築のデザイン研究が一つの島を形成しているといえるだろう²。

つづいて、2007年3月、オーストラリアのクイーンズランド大学訪問時にPaul Memmott教授とお会いしたときにも、オーストラリア先住民の伝統的居住空間、環境の建築人類学的研究プロジェクトについて紹介していただいた—同教授は、同上大学建築学部〈建築とIT情報技術〉グループの一員であるが、建築デザイン研究者であると同時に人類学を修め、上に述べた意味での〈デザイン的人类学〉の一つの方向を開拓していたわけである³。

建築人類学に触れて筆者が感じたのは、今までの建築のデザイン論に比べて、個々の建物を含む景観や環境全体を問題にして考察している特色、また、建築の機能に注目するだけではなく、それがその文化の人によってどう用いられ、どのような意味ある経験をともなうその建築空間で生きられているか、すなわち、文化的経験としての建築と空間のありかた、存在様態を明らかにしようとする特色であり、構想に人類学的特徴がこもっていることである。建築デザインの記号学分析に加え、その建築空間で生活する人の経験の現象学的研究を組み合わせた枠組みがそこにあるといえる— 筆者が現在進めているプロジェクトの一つに、〈多元感覚人類学への道筋拡大と情報社会の進展への応用可能性〉があるが、この観点から見た場合、その建築空間を生きる人々の感覚的感性体験を調査者が感覚を同期させて追体験すること、そしてさらには、現実の立体的実体的時空間だけでなく、デジタルな映像装置や仮想現実装置を媒介にした感覚経験を人間体験として捉える枠組みを組み込んで研究調査すること—この2点と接続させていくことが重要になろう。

なお、このような視点にも関係し、ここ15年ほどの間に展開されてきた文化人類学にお

ける〈存在論的転回〉の新理論潮流が、物質性、境界などの問題に絡めてデザイン研究を掘り下げる考察と繋がりうる地平をみせてきている点も注目される⁴。

2. オーストラリア先住民の絵画研究とメッセージ・スティックとの出会い

2.1. オーストラリア先住民の絵画研究の文化人類学的調査

2006年～2013年の間、隔年度くらいで、主に、3月の短期間にオーストラリアで短期調査および学会発表をすることがあったのだが、2007年3月にやはり、クイーンズランド大学のコミュニケーションとアート研究科の Sally Butler 准教授のご教示により、アリス・スプリングスに飛び、現地の先住民絵画美術館 Mbantua Gallery の設立者 Tim Jennings 氏に会う機会を得た。同氏から、オーストラリア先住民の絵の収集と販売を手掛けていった経緯を聞き、倉庫に保管されたおびたしい先住民の絵画やその他の民具・工芸品を見せていただき、実にたくさんの先住民の絵画に触れることができた。また、同氏の紹介で先住民画家として著名な Barbara Weier さんに数回面談、さらに、同地の公園で偶然絵を売っていた Audrey Martin Napanangka さん（後でイタリアの美術館でも作品特集に出展した著名なオーストラリア先住民画家と判明）とその夫（子供時代にイタリアから豪州に移住し、兄がイタリア料理店をアリス・スプリングズに開店したとき手伝いに来て以来この地に定着）と娘とも交流し、絵画の制作や販売の一般的なやりかたなどについて教えていただいた。

路上で絵を売っていた他の先住民の画家たちに接した一絵を購入するかたわら、絵の意味や制作の仕方などについていろいろ質問したのだが、先住民のアイデンティティをもつアーティストたちに対してクイーンズランドやシドニーで行った路上での短期調査と同様のやり方で、ひとしきり調査することができたのであった⁵。

このときの調査テーマは、先進国や都市の人々に絵が売れるために、先住民画家の絵に市場価値が生じている点、それを白人の画商たちが仲介し、国際的なアート・マーケットが成立している状況、そのなかで、オーストラリア先住民の画家たちが〈エスニック・アーティスト〉的なアイデンティティをもつようになっている状況の研究であった。そして、アンソニー・ギデンズが指摘するグローバル化による再帰的近代化現象のひとつとして、先住民の〈エスニック・アーティスト〉への変容を跡づけることも関連課題テーマのひとつであった。

オーストラリア先住民の絵画が絵のかたち、構図デザインのパターンに共通の特徴を示す点、アクリル絵の具をキャンパス画布に描くまでに至る絵の描き方がいくつかの段階で変遷してきたが地域で違う展開があった点の2点の調査も関連する追加テーマとした。オーストラリア先住民が住む地域、属する居留地と部族集団の地域の歴史によって、系譜が異なった仕方でも発達した経緯を調査と文献研究によって確かめることができた。たとえば、西洋絵画の影響を直接うけてた地域とは、Alyawarre 族が住む居留地ユートピアに由来する画法はかなりことなっていた。後者の地域の場合は、伝統的な儀礼のときに岩砂を用いて体に模様を描く習俗に発した点はあるが、当地に赴任した白人の絵の教師が教えた西欧式画法からも絵の具の使い方や構図のとりかたに関して影響がみられたし、また、たまたま先住民たちが習う機会をもったインドネシアのバティック式臙染め法からも影響をうけていた。

この保留地の先住民画家と Tim Jennings 氏にだんだん関わりが生じるようになった。もともとは同保留地を車で警邏巡回する警官だった同氏が、先住民のひとたちが制作するアート系の作品に興味をもって収集するようになり、最後には、キャンパス画布とアクリル

絵の具などの用品を無料で提供するようになっていったのである。数ヶ月ごとになされた同氏の次の訪問にあわせて、現在のかたちのような先住民絵画を少なからぬ先住民の人々がどんどん描くようになっていった。Jennings氏は警官を退職し、アリス・スプリングズで小さな観光みやげ店を開き、その一角に先住民物を置いていたところ、それが多く売れるようになってきたので、とうとう、先住民絵画美術を専門とした **Mbantua Gallery** を設立する展開となった—作品を展示し、販売もし、また、一部分はオーストラリア先住民の居留地帯の民族生活文化用具の博物館風のコーナーも設けていき、一種本格的な美術館のような様相を呈していったのだった。

彼のもとに、世界的にも著名になった **Barbara Weier** さんのような先住民画家が居留地のユートピアからアリス・スプリングズの町に移住し、いわば専属画家のようにして暮らす例も出てきていた。彼女の母の姉である **Emily Kame Kngwarreye** さんは、ユートピア居留地で、60歳半ばからバティック式縞縷染めの作品を制作していたが、70歳を過ぎてから、姪の息子がアデレードで開いた絵の店に出品したいと願ったことが発端になり、姪の流儀を習ってから絵画を描き始めたのであった—やはり世界的に著名なオーストラリア先住民画家となった。1996年に没していたが、2008年5月～7月、東京・六本木の新国立博物館で『エミリー・ウングワレー展—アボリジニが生んだ天才画家—**Utopia: the Genius of Emily Kame Kngwarreye**』が開催されている（私も同年7月の末、ちょうど前任校大学院の講義に2週間招聘していた文化精神医学者 **L. J. Kirmayer** 教授とともにこの印象深い展覧会を鑑賞することができた）。

Mbantua Gallery は、アリス・スプリングズで一番大きい民間美術ギャラリーとなっているが、オーストラリア先住民の絵画が先進国で売れ続けているため、何人もの画商が同地に拠点の店を構えている—ドイツから中年期に移住し、豪州の移民局の役人を定年退職してから同地で画商を始めた **Obermeyer** 氏は、先住民の絵をすべてデジタル画像にし、デジタル美術館をサイバー空間に設け、そこに登録する愛好家たちにオーストラリア先住民の絵画を売っていた。彼の考えでは、先住民にとっての絵の意味を理解する必要はなく—オーストラリア先住民文化の解釈を重視する **Jennings** 氏の立場とは反対の極に位置する—それを愛好して購入する人々が、例えば抽象絵画を好みで鑑賞するように自己流で受け取れば良いのだと、自説を述べていた。

オーストラリア先住民の絵画は、彼ら画家たちの出自の地域による様式の差があるとはいえ、先住民の伝統的儀式に結びついたボディペインティングなどにみられる文様とも共通点があり、また、神話の光景に出てくる食べ物や動物に結びついた抽象文様が重要な特徴の一部となっている点もほぼ共通して見られる場合も少なくない。とはいうものの、個々の画家の個性による芸術的な抽象化が発達していくような経緯の例もみられる。さらに、**dreaming** という英語で言われるオーストラリア先住民独自とみなされている〈夢見の時〉を絵に描くというやり方もとられ、私たちのような先進国消費者がオーストラリア先住民独自の文化の印象を感じる様式を示してきているのである⁶。

通常の絵画批評の文脈で、絵の構図やデザインを論ずる場合には、芸術ジャンルの自律性—すなわち、芸術家個人が社会的経済的政治的状况の影響を最小化した環境のなかで芸術的価値を追求する自律性—をまず前提・前景とするために、形のデザインの次元にそのまま踏み込めるものと思う。オーストラリア先住民の絵画の構図やデザインを論ずる場合には、

このジャンル自律性をまず前提・前景とするのは、文化人類学的アプローチとはならない。

上に述べたような外からの影響の絡み合い、絵画を描く媒体の変化、先進国の人々から向けられる注目の視線の中で自分たちの文化的独自性が経済的手立てのニッチを見出していくという、オーストラリア先住民のアイデンティティの文化政治学的再帰的近代化過程における軌跡などとの相関的絡み合い—こうした過程のなかでの動きの軌跡が、絵画の構図・デザインの 動態的変遷の媒介変数となっている、と考えるべきなのである。この軌跡のなかで変動し、再構成される文化的意味づけを了解していくなかで、文化としてのデザインの有り様がとらえられるものと思う—このように構図・デザインの生成・変遷・編成過程の文化人類学的把握を行い、いわばデザインを動態的に捉えるアプローチが必要なのではあるが、他方、オーストラリア先住民の画家たちの文化的アイデンティティ再構成や個性の次元をも超えた次元も同時に捉えうるという観点も、部分的には意義があると思われる—劇作家・芸術批評家の山崎正和氏が論ずる〈装飾とデザイン〉の起源や歴史的転回の次元が、やはり、オーストラリア先住民の絵画を通したデザインの様相のなかに宿っている、と立論しうるからである⁷。

2.2. オーストラリア先住民のメッセージ・スティック

クイーンズランド、アリス・スプリングズ、メルボルン、シドニーの美術館・博物館を見て回り、先住民の絵画や生活文化に関わる展示物にふれて印象を掴むことも平行して行なったが、そのときに、英語で表現されている message stick にあらためて大変興味をもった⁸。それまでもオーストラリア先住民のメッセージ・スティックを見て、多少の印象をもってはいたのだが、デザイン的人类学との関係で、それをあらためて検討すると意義が大きいという直観がはたらいたのである。この興味が、いわば発酵し、その後、本学・情報マネジメント学部の専門科目〈情報メディアとデザインの文明論〉を編むよすがとなった。

オーストラリア先住民のメッセージ・スティックは、ある部族の村から別の部族の村に伝令を出すときに、使用者が腰に帯同させるもので、20~30cm の棒の表面に角張った線やドットを刻みつけたものである。

*図1



[message stick](#); British Museum; CC BY-NC-SA 4.0

*図2



A native carrying a **message-stick** (Euahlayi Tribe: 腰につけている横長の棒)

19th century The Public Domain

それぞれのメッセージ・スティックの図柄全体がデザインのように映ってくる。絵文字のような記号と装飾の図柄部分が合わさって、全体としてはデザインをなしている。

1897年のRH Mathewsの人類学論文から引用した描写図版を参照すると、デザインとしてのメッセージ・スティックという側面がよくわかる。

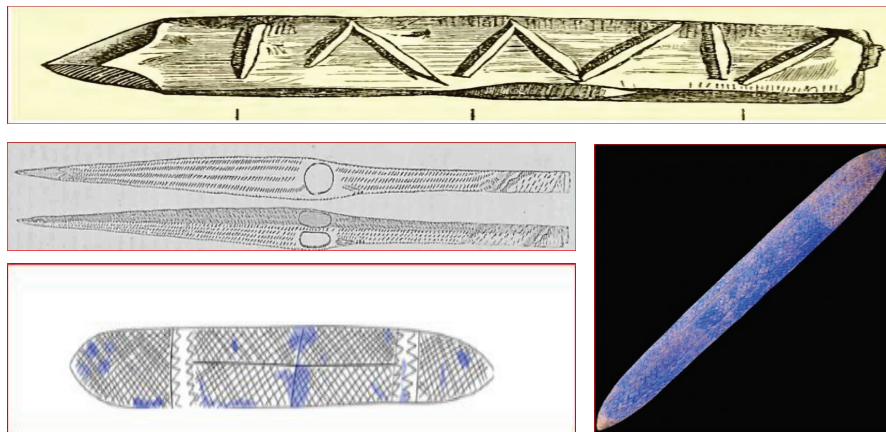
*図3



. R. H. Mathews "Message-Sticks Used by the Aborigines of Australia." *American Anthropologist*, Vol. 10, No. 9, 1897: p.292.

棒の左右の端には切れ込みが、それぞれ 5 カ所ある。これは単に装飾のためになされるときもあれば、他の事例でのように、表側右の最上部切れ込みが、招かれる側の長老の数を表すなど、切れ込みが意味をもつ場合もある。メッセージ・スティックには、①人の形など絵文字のようなもの（図像）や、河を示す地形記号のようなもの、また、②十字印や棒の端に切れ目をいれて装飾するための模様とするもの、さらに、③線や曲線をパターンにまとめて上げて慣用的に使われる *yamumunyamun* という慣用模様（図柄・図像）などが刻まれていることもある。棒に何も色が塗られていないこともあるが、赤や黄に彩色されている場合もある。①はメッセージ内容をゆるやかに指示する記号の役割だが、メッセージ・スティック全体の絡みでは②や③と一緒にあわさって、全体のデザインの一部となっている。②や③は直接的装飾デザイン部分にあたるが、やはり、全体レベルでは全体デザインの一部となっている。また、③の慣用的模様は、部族や地域の特徴となっていて、時に、特定の部族に著作権があるとされることがあり、その場合は、他の集団は使えない。次の図からもデザインとしてのメッセージ・スティックの姿がわかると思う。

*図 4



左図 4 枚は、すべて、CC BY 4.0。出展左上は、Lumholtz, Carl. 1889. *Among cannibals: an account of four years' travels in Australia and of camp life with the aborigines of Queensland*. New York: C. Scribner's Co.

左中央は、Adolf Bastian 1881 “Australische Schriftsubstitute.” *Zeitschrift für Ethnologie*, Transactions. 13: 192-193.

左図下と右図黒背景図の出展は、注 8) に掲げた Piers Kell が Howitt AW (1889) から引用したものを再引用[135 頁]。前者がメッセージ・スティックの背面であり、ジグザク縦波のような縦の矩形が左右二つあるのは、ヒクイドリを表す。中央部に四つの柵をなす部分が斜線交錯状の線の中を含んでいるが、カンガルー科のワラビーを表す。19 世紀に、くクィーンズランド州の Yagalingu 部族から Wadjalang 部族の男性に渡されたもので、上記動物の狩りへの招待に使用。

ここで、先住民におけるクラン単位のデザイン著作権観念という特徴にふれる必要がある。先住民の神話に関係したトーテム動物などのデザイン、あるいは、夢見で得たイメージからのデザインは、その部族集団独自のもので、他の部族集団は許可なしで使用できない（アデレード大学・Aaron Corn 教授〔民族音楽学・民俗学〕の調査・研究でもこの点を確認できる—同教授がシドニー大学にいたときに筆者がお会いして、研究の紹介をしていただき、アーネムランドから伝統儀礼の保存研究に来ていた先住民の長老に紹介もしていた）。著作権的な意味は、メッセージ・スティックの図柄にも部分的にみられ、どこかの部族かの特徴がわかる場合がある。部族独自の表徴として識別される特徴が読み取れる

わけだが、ここで山崎正和のデザイン論を引くなら、デザインの二つの極性、すなわち普遍的で簡素化されたかたちとしての狭義のデザインへの極性方向と、デザインに導かれて制作された個物が個物性を示すべく装飾的に拡大された特徴への極性方向が合わさったもののなかに、部族独自の表徴が表現されている、ということになる。

メッセージ・スティックの事例から分かるのは、情報を載せる搬送体としてのメディア（媒体）は、メッセージを載せる枠組みをもつことが了解される点である。情報を載せる枠組みの部分は装飾的デザインが入りうる。さらに、メッセージと装飾を配置する仕方が枠組みともいえるので、枠組みは全体としてデザインの様相をもつという点も了解されよう。

本学で私が担当する〈情報メディアとデザインの文明論〉では、オーストラリア先住民のメッセージ・スティックを文明の〈未開〉状態に繋がる事例としてみて、そこに情報メディアとデザインの始原・原点が宿っていると理解し、立論を組み立てた。先行研究がそもそも僅少であるため、探索的検討を重ねた。そこから、文明段階の進展に連れて、各時代の代表的情報メディアがもつ枠組みがどう変化してきたのかを検討していくという構想にたって、日本の絵巻物の異時同図法を用いた図柄などにみられたデザインの文化人類学的検討を加える試みも行ったわけである。

3. デザインの人類学の視座

3.1. 基礎作業としての用語〈デザイン〉用語の検討

西欧語〈デザイン〉design は、ラテン語の *signum*、すなわち、記号という意味の言葉に由来し、語源的には *de-sign*（記号を記す、図示する、設計する）に遡る⁹。今日では、名詞の用法で、意図、目的、図式、プロット、モチーフ、基本構造などの意味をもち、また、ずる賢さや欺瞞という意味にも結びついている。動詞の用法では、なにかを仕込む、仕組む、刺激する、牽引する、スケッチ（描画）する、ファッションを作る、なにかにデザインをあてがう、という意味をもつ。

英語の *design* は、もともと 14 世紀のフランス語から導入され、当時の意味は、現代の語〈*designate* 指し示す〉に近い意味であった。16 世紀は動詞の意味〈なにかを意図、計画する〉および〈形を描く、トレースする、辿る〉の二つの意味を表すようになった。後者は、*Dessin* する、という意味と同じである。18 世紀までには、組み立てるため描く、という意味になっていき、19 世紀になると、建築のデザイン 制作・創造という意味に転化し、さらに、創造的活動の計画・制作の意味に拡大された。そして、現代では、ヴィルム・フルッサーが論ずるように、より技術的、専門的、現代的、美的なものの制作・創造にあずかる意味に引き寄せられるようになっている。このデザインの語を使って、デザイン研究や美学・芸術学、社会科学、建築学・工学・生物学等の自然科学が、それぞれの専門領域で、意味を限定・区画して使っているわけである。日常語においても広く曖昧な幅をもって使われている用語が、諸科学領域の、より厳密な限定的用語に造形し直されて使われていることになるわけだ。日常語そのものの土台が歴史的に変化していくことは必定だから、時代の変化ごとに、専門用語が再度限定され、区画し直される必要が出てくる。そのため、とくに人文社会科学では、中心的鍵語とそれに関連する用語群をひとまとめの用語系に配置する構図を設定しつつ、中心的鍵語を限定・定義する検討をし、その中心的鍵語からどこまで問題設定と展望がひろがるのかを見ていく、ということが不可欠となってくる。

デザインを中心的鍵語として検討していく場合、美学領域でこの概念が展開されてきたのでその検討を踏まえる必要があり、その際、スタイル（様式）、デザイン、装飾という三つの用語を組として検討・区別して論じつつ、芸術のあり方が時代によって変遷した経緯とも関連づけながら、理解を進める道筋を辿ることにもなる。

美学辞典を参照すれば、スタイル（様式）は、目の前に提示されている美術作品を味わう見地に立ってその有様を記述分析する時、見えてくる形のことを意味しているのに対し、デザインとは、美術作品を作る過程で形を作っていくやり方、つまり、制作設計作業のことを意味している。スタイル（様式）は、美術史においては特定の時代・地域・集団で記述分析して浮かび上がってくる集団次元に共通した形のことであるが、画家個人個人に見られる個人的な形に焦点を当てる場合もある。スタイル（様式）は、構造人類学者レヴィ＝ストロースのいう〈構造〉に対応し、デザインは制作作業する〈出来事〉に対応すると考えてもよからう。構造は現れてくる出来事の形を枠付ける規範的な作用を及ぼすが、出来事として現れる制作作業は、構造の一部を逃れる形で現象してくる一集合的に成立している規範を破る創造的動的側面を潜ませている側面もみせる場合がある。前に掲げた K. M. Murphy に代表されるデザイン人類学では、美学領域の議論とは異なり、デザインという概念を形の様式と制作過程の二つを併せ持つ用語として検討している。この点についてはさらに後述するが、デザイン、装飾をまた異なった切り口で論ずる前掲の山崎正和の優れた検討がある—a) デザインは、その統合的意思の作用によりイデア的な次元での普遍的な形まで極性化された側面であり、b) 装飾は、個々の作品が示す個性発露の方向で過剰に施された形の極にむかう方向性に現れ、デザインの統合作用意思（過剰な秩序化への作用）に拮抗して逆方向の過剰な秩序転覆化への極を現出させると山崎は論じる。—デザインと装飾という二つの極性が相互に絡み合って作用する結果、美術作品が制作結果として現れるのである。

先にも述べたように、オーストラリア先住民のメッセージ・スティックの場合は、ドットのような刻み模様は、a) の側面の方向性を示し、人間の絵の部分には、b) の側面が部分的に宿っている、と見ることができる。また、メッセージ・スティックを様式としてみていく場合、部分的様式が全体枠組みのレベルでの様式と相互作用を起こし、それが a) の意味でのデザイン性に向かう方向性を示す側面があると同時に一部族特有の部分的特徴を示す場合にみられるように—同時に b) の装飾への極性も見せるのである。つまり、オーストラリア先住民のメッセージ・スティックのデザインを論ずる場合には、部分と全体の水準が相互作用しつつ全体包括的枠組みに統合されるという重層的作用にもさらに焦点を当てる必要がある。オーストラリア先住民のメッセージ・スティックは、近代の芸術作品のようにそれ自体を制作目的とする芸術の自律性を持たない。あくまで、伝達手段にするための実用性が第一義とされ、その目的の中で、典型的作り方、制作手順があるわけである。オーストラリア先住民の文化社会のなかに埋め込まれ、部族単位のレベルもふくめた制作の文脈の理解を抜き去ってしまうことはできないし、メッセージ・スティックを使つての伝達と、部族集団間での取り決めの交渉の文脈も考慮に入れる必要があるのだ。

3.2. デザイン人類学の展望

用語の検討を踏まえ、デザイン人類学の領域での代表的議論と動向を展望したい。

K. M. Murphy は、まず、①デザインの人類学、②デザイン（論）のための人類学、③人

類学のためのデザイン (論) の3つの潮流が、デザイン人類学に併存している点を検討している¹⁰。—②は、2000年初め以降に現れてきたデザイン民族誌調査研究のことであり、デザインの企画・実現をおこなう会社や教育機関でおこなう参与観察研究のことを指し、デザインという文化的社会的企てを、実際の人々が生きて経験する現場のフィールドワークによって、より具体的にあきらかにし、それによってデザイン研究をさらに豊かに展開するよすがとする、という試みのことである。科学技術の人類学の立場から、日本の建築家隈研吾の建築事務所でフィールドワークを行った研究が一つの例として挙げられるよう¹¹。③は、デザイン論やデザイン研究領域での知見を文化人類学に導き入れることによって、人類学研究に新しい課題や理論的展望を拓こうとする2010年以降に現れた試みを指す。この場合、民族誌的フィールドワークが実は無色透明なわけではなく、現場の人々との相互作用の中で、少なからず介入的な影響を与える場合があるという1970年代後半の人類学研究の反省を踏まえ、現場の人々とともに近未来を設計する活動を積極的に含むフィールドワークという考え方を取っている。異色の現代人類学者 T. Ingold や G. E. Marcus らの議論が関与してくるし¹²、また、二十一世紀の転換点付近で顕になってきた人類学における存在論的転回の動向ともつながるとみてよかろう¹³。すでに述べた用語の検討でえられたデザイン、装飾、様式概念区分にみられた極性のダイナミズムの考えかたを、人類学的な文化概念のダイナミズムと共振させるような方向性が考えられよう。

とはいえ、①の〈デザインの人類学〉がデザイン人類学—これは上記の三潮流を総括した呼称であるが—のもっとも基礎となる考察領域となっており、K. M. Murphy は、西洋哲学・思想の歴史的伝統におけるデザイン概念の推移に照らしあわせて、やや複雑な議論を加えている。—簡略化してまとめるなら、全能の神が造り給うた形（自然に備わっているさまざまなかたち）に潜むデザイン）にふれた人間が、そこに神の設計図を読み取り、また、それを模してミメシス的に類似物を制作・デザインする、と考えたのが古典時代、そこからルネサンス時期を経て、次第に、神ではなく、自然自体がおのずから現われる作用としてデザインを潜ませる自然物を顕現させている点へと着想が変化し、思想が変転していく。また、近代に入っていく過程で、建築のデザインなどの科学的デザインにも意味が拡張されていく。デザインの主体性が神に帰せられていた時代から、デザインをする主体の存在が見えなくなっていく時代に変遷し、さらには、人間集団こそがデザイン行為を行う主体であるという近代的認識に切り替わっていき、近年、さらには、物質にもデザイン行為過程にかかわる執行主体性があるという存在論的転回による見解が付加されていく。このように、時代とともに、デザインの思想が変化する過程の検討が、まず、デザインの人類学の領域の基幹検討課題となり、それを踏まえた上で、現代のデザインの人類学のデザイン観が提出されていくのだが、この作業は、上記3・1でみた用語の検討を、人類学に惹きつけて行っているとみることができよう。

このような検討を踏まえて、デザイン概念の動的再理解をしていくと、①の領域においては、次のような研究が可能となってくる。—コンピューターで支えられた共同作業として行われるシステムエンジニアリングで、その集団のシステムデザイン作業が上首尾に行くのかどうか、うまくいかなかった時にはどこに原因があるのか、という研究がデザインの人類学の枠組みとフィールドワーク調査で可能となってくる。例えば、デザイン設計がまずい物体がもつ形や機能が原因で、それに触れたり使ったりした人が障害を被ってしまう、とい

うことが障害法律訴訟の事例からわかり、ではそのデザインをどう変えたらいいのか、という研究も科学技術の人類学と運動したデザインの人類学の研究例となる¹⁴。デザインを研究対象に据えた人類学的研究では、これまでは、様々な形やパターン、整序の様態・様式にだけ焦点が当てられてきたのだが、デザインの人類学の新しい枠組みでは、デザインを行う行為の過程そのものを調査するわけであるので、形と行為、効果の全ての絡み合いを考慮に入れることが可能となる。そしてデザイン行為が孕む道德的效果も問題に取り上げる射程をもつのである。

オーストラリア先住民の伝統的メッセージ・スティック使用は衰退してしまったので、デザイン人類学の新しい枠組によって研究し直すことは不可能であるが、メッセージ・スティックの創発時から、定着時に至る過程で、どのように変化し改変されていたか、他の伝達手段や類似の儀礼装飾物とどう機能分化していったのかを知ることができれば、メッセージ・スティックそのもののデザインのみならず、オーストラリア先住民文化社会全体の布置のなかでコミュニケーション・デザインの動的過程におけるメッセージ・スティックの姿を掴むことが可能になるだろう。

デザインの新しい枠組は、社会秩序形成と維持のもとになる人間のデザイン能力を研究するだけでなく、秩序を革新・更新して新しいあり方を創発していく人間のデザイン力にも焦点をあてる志向をもつ。ということは、デザイン行為を行う人間たちの生きた経験の様相に深く焦点をあてていく志向をもつのである。この点において、やはり同様の志向を別の領域地平で示してきた感覚人類学、多元感覚人類学と組み合わせる研究課題領域を拡大しうる余地が大きく見込まれるのである。

4. デザイン人類学と多元感覚人類学

4.1. 多元感覚と経験—感覚人類学のアプローチと調査方法

1990年代に現れた文化人類学における感覚論的転回と、近年の多元感覚論に基づく感覚人類学的アプローチについては、筆者の2020年3月発刊の前掲研究ノートで、コンコーディア大学 David Howes 教授の研究室 Centre for Sensory Studies の訪問の経緯と、彼の研究プロジェクトチーム The Concordia Sensorial Research Team の諸研究の紹介、および、同大学 Milieux 研究所の研究プロジェクト紹介などを通して、最新の動向をすでに記しているので詳細はそれに譲りたい。なお、ハウズ教授を筆者が前任校大学院に招聘して研究シンポジウムを開催した機会に、筆者が同教授を半日鎌倉に案内し、長谷寺の大仏の中に入っていたことがあった。2011年7月のことだったが、同教授は大仏の中に入ったときに感じた感覚的経験をよく覚えており、自分の論文の一部でそのときの感覚経験を反芻するようにして記述している¹⁵。大仏の中の空洞に入るという経験はそうない機会であったし、長谷寺の境内から大仏にアプローチする移行空間から、いわば胎内回帰にも擬せられるような境界移行の時間経験も感じられた、ということであった。ハウズ教授の場合、感覚人類学者としての研究志向と自己訓練を経たその人が、自分に湧き起こってくる新鮮な経験を出来る限り遮断せず、抑圧せず、十全に味わうという姿勢を、参与観察者として肌に纏い、その経験の心像を記述文の形で反芻する、というやり方を感覚人類学の一つの方法としている。これはナイーブで客観性を欠く主観的なやり方であるとみなすとしたらそれは誤解である。ニクラス・ルーマンが構想するオートポエティックな自律制御系を内包する複雑

な社会システムにおいても、現場のフィールドワークの参与観察による経験帰納的発見的調査法の有用性は担保されると見られているし、優れた臨床観察家がもつ卓越した〈訓練された主観性〉(E. H. エリクソン)の導きの糸は効果的である。また、文化人類学自体、ここ15年あまりの存在論的転回や、ポスト・プルラリズムの議論や、スピノザのアフェクタス論やドルーズの哲学的認識論、それと部分的にからみあったグレゴリー・ベイトソンの精神の生態論などの理論的諸地平の波に幾重にもさらされて、少なくとも理論的言説においては科学的認識論存在論からの批判に十分耐える検討を積み重ねてきている。

ともあれ、人々の感覚経験の彩を十分に追体験的に了解・理解する感覚人類学的方法は理論的方法論としても、また、実際的方法技法としても、開拓されて使われるようになってきている、たとえば、伝統文化社会における病気の経験と治癒の身体的経験も、感覚のまといを脱ぎかえて一新するという見地から捉え返すような新たな理解が、感覚人類学のアプローチから可能になってきているのが、有効例としてあげられよう。Sarah Pinkによる映像人類学と感覚人類学を組み合わせた研究例では、たとえば、年配の女性が自宅の空間で夕方から夜になるときに照明の光度や色をどのように調節すると、一番落ち着く習慣的感覚経験となるのかを、その自宅の照明をふくむ変化を映像記録して、その女性にみせながらインタビューによって彼女の感覚経験の特徴を理解しようとするやり方などが使われている。

日本の香道に見られるように、匂いの感覚を深め、その感覚の境地を極め、和歌に託して表現するなど、感覚経験を文化的に洗練された方法で深めていくような文化的実践を調査で了解していくためには、感覚人類学的方法が必須のものになる。各感覚器官の作用が経験に特色を与える点を、センサーでの定量的測定対照法なども部分的に使用しつつ、単純な五官の感覚器官には還元しえない重合的感覚、人々の統合された多元感覚の経験相をそのまま了解していく方法を開拓していくこと、また、他方では、経験の現象学的全体性そのものを捉える志向をも携える方法を併用していくこと、その双方が必要である一識ること、感覚でうけとめることに関し、歩くという経験一歩く、動くことが、すなわち識ることそのものの包括的全体経験過程である点一からこの包絡的全体性を考察した現象学的人类学者ティム・インゴルドの経験と知覚の枠組みをも志向・援用していくべきなのである¹⁶。

4.2. デザイン行為と多元感覚

日本の特定分野の匠の熟練工の方々は、現在のところどんな精密な加工機械を持っても及ばないような精度で、特殊金属や特殊炭素繊維の板の曲がり具合を微細精密に調節して磨きあげることができる一微妙な不具合が一切あってはいけない宇宙ロケットの外壁合わせ板の基幹部分は彼ら名匠の技によって最終加工されているという。フランス大使館主催のWorkshop Ecotic 2020 研究会(2020年3月9日)において交流した日本の研究者が、AIの深層学習と強化学習を用いて、名匠の技に擬似的に近づこうとしているものの、目下の達成度としては芳しくはないとのことだった。そのため、名匠が主として手の肌で金属板の曲がり具合をなぞって、どう修正すべきかを判断し、また、習熟度を上げ保っていく感覚経験判断の基盤をなんとか探りたいということであった。名匠は、多元的合成感覚経験像に由来する直観を形成していると思われるが、手の指や肌で感じる感覚経験がひとつの不可欠な評価軸となっていると思われるので、これを多元感覚人類学の枠組み立って、探索的に調査研究するのは可能と思う。おそらく、自分の熟練度を高める過程で、前アイコン言語に近

い比喩的言語を用いていようし、自分の手や指の感覚（多元感覚）をリセットして鋭敏に保つための、身体ウォーミングアップの儀式的手順を個々の匠がそれぞれに獲得しているのではないかと予想される。さらに、デザイン人類学の新たな枠組みと多元感覚人類学とを組合わせて調査していく実際的手法の開拓を探索的に行うことができるのではないかと、と思われる。名匠がデザイン行為過程で、どのような幅をもって感覚経験をまとめ上げているのか？ それを知るためには、全過程を段階区分して調べていくという方法が有効ではないか、と思われる。よりよく効果的なデザイン行為過程を積み重ねていくと、おそらく名匠レベルに到達することができ、あまり効果的ではないデザイン行為過程の範囲で固定化していくと、名匠にはなれないのであろう。デザイン過程に現れる感覚経験に縁取られた人間の身体の技という新しい研究課題が、デザイン人類学の新たな枠組みを取り入れることによって、立ち現れてくるわけである。

この例の考察のように、人々のデザイン行為過程のすくなくとも一部には、人々の感覚経験が多能的に絡んでいることが予想される。建築設計事務所での主たる活動とは異なり、デザイン制作そのものを活動の全面に出していないような人々の活動の場合でも、活動の行為過程にはデザイン制作的行為が潜在しているのである。このように考えると、デザイン行為と多元感覚経験との絡み合いを焦点化し、デザイン人類学と多元感覚人類学を組み合わせ、連携させる研究の探求は、今後、大きな価値を生み出していくものと思われる。

4.3. デザインの人類学と多元感覚人類学が繋がる新たな人類学的課題の探求

隈研吾の建築事務所で参与観察を行った前掲書ソフィー・ウダール『小さなリズムー人類学者による「隈研吾」論』は、興味深い人類学的研究ではあるが、多元感覚人類学の視座を組み入れて、再分析ないし追加再調査の余地があると思われる。デザインを生み出す組織の調査研究に、今後そのような追加調査を加えていくということにより、デザイン人類学の成果をより大きくしていく可能性があると思われる。

Lois D. Frankei (2014) の 調査研究は、産業デザイン調査へ感覚人類学のアプローチを組み入れて行われたものである¹⁷。この研究では、ひとつの眼目として、高齢要因で身体機能の一部が損なわれている高齢者の方々に、着用可能な PC 付き器具のデザインを効果的に開拓するという課題に取り組んでいる。補助器具を着用することによって、また、その補助器具着用がしっくりいく使用感覚経験をもたらす場合には、身体機能の一部の損傷があってもほとんど差し支えないか、あるいは損傷部分の回復の効果があがる、といった事態が期待できる。この課題を感覚人類学にもとづく調査によって確かめようとする質的調査法による構築主義理論に立った実験研究である。この調査では、健康フィットネスを促進する器具や腕につける PC 制御で作動する装置を、身体機能が衰えた高齢者が使ってみて身体で感受する使用感がぴたりくるように、これまでのデザインの開拓改良を目指す。

歩きづらいなど身体の一部の機能が衰えた年配者とデザイン担当の若者の学生がともにデザイン作業の場で共同作業をすることにより、歩き方、仕草や身振りの仕方の癖、座り方、話し方が年配者と若者では異なることに気づき、その背景には、高齢者のほうが不自由となっている多能的身体感覚の違いにもっと注意を払っている点があるのを若い学生が知る機会となっていく。高齢者のほうが身体意識や感覚に、より注意を向けているため、身体の動作の仕方も微妙に異なってくるし、仕草・身振りの仕方やそこに込められた習慣的意味の

微妙な違いが宿ってくる。こうして、デザイン作業の場の参加者の間では、世界観・価値観・動作観の違いがあることにみんなが気づいていくのである。この経過のなかで、高齢者の身体にいわばやさしい着脱式の用具のデザインの発見と改訂の道筋がみえてくる。

この研究は、デザインの人類学と多元感覚人類学の枠組みを重ねることによって、質的感覚人類学的調査のやり方が何回も改訂され、より効果的なデザインの開拓に結びつく調査枠組みを生み出した研究と評価できる。

この研究は、デザインの人類学と多元感覚人類学が連携することにより、実り豊かな新たな人類学的課題を開拓しえた雄弁な例といえよう。カナダでなされたこの連携研究枠組みを使って、日本で研究をおこなうことにも、文化社会差と感覚経験が絡む問題が浮かび上がることが予想され、意義が大きいのではないと思われる。また、同様な試みにより、さまざまな新しい課題が見つかっていくことになろうと思われ、デザインの人類学と多元感覚人類学との連携によって、新課題が次々に見つけられていくことになろう。

4.4. 心理歴史誌的文化療法過程に新しい研究焦点をあてる可能性

筆者が現在手掛けている研究調査に、デザインの人類学と多元感覚人類学とを連携させた連携研究枠組みを組み込み、新たな知見を生み出しようと思われるので、最後にこの点について一言しておきたい。

〈心理歴史誌的文化療法〉psychohistoriographic cultural therapy (以下、PCT) は、ジャマイカの黒人系精神科医 Frederick Hickling 医博によって形成前記を経て 20 年あまり前に開拓が試みられ、近年整ってきたジャマイカの独自色が色濃い一種の心理療法であるが¹⁸、筆者は、2020 年の 2 月に研究者や療法家の研修の目的で開催された 3 日間のワークショップに参加する機会を与えられた (科研費研究による調査出張)。第 2 回目の研修会であるが、海外の人間の参加を初めて許可する研修会となったので、筆者をふくむ参加者の半分は海外の研究者や療法家であった。この療法は、西欧の近代精神医学の枠組みのなかで発達した芸術療法を下敷きに行っている一面があるため、その一面では患者や参加者が演劇を演じる演劇療法の趣が感じられる。とはいえ、現地特有の太鼓や楽器を使い、踊ったり歌ったりするプロの俳優も参加しているので一現地の精神保健支援看護師の夫でもあったがージャマイカ色が濃厚であった。

開始してすぐの段階では、エンカウンターグループのセッションのようなやりかたで、参加者が少しく知り合い、緊張をといて和らいでいく過程がみられた。そうこうするうち、当てられた参加者が台紙に、参加者たちが思いつく言葉や文言、詩的な言い回しを次々を書いていく。それらの言葉を組み合わせたり、並べ替えたりしながら、ひとつの歴史的物語になるような文章を組み上げていく。白人による過酷な人種差別を伴ったジャマイカの植民地の歴史の挿話や歴史的登場人物がとりあげられる傾向があり、参加者はリハーサルを通し、植民者側となったり、奴隷側となったりしながら、物語の一部を変え、演技方を変える相談をしながら、簡単な歴史劇のかたちにとまとめあげ、劇を完成までもっていくのである。

もともと精神科病院の入院患者とともにスタッフが行う芸術療法を改訂したものであるが、その後は、病院外地区コミュニティで実施する一種の精神保健運動となり、さちには、小学校で非行を減らす副次的効果があるとわかったため、不安定な心理傾向を潜在させている黒人系の小学生むけにも、描画をひとつの中心に加えた PCT が行われている。

私の文化人類学的見地から捉えた場合、PCT は、葛藤に係る一種の修復儀礼とも解することができると思われた一人種・階層・精神疾患の患者など社会的スティグマをもつ異質で多様な社会的な小集団が葛藤を孕みつつ、アイデンティティのよすがを築く社会文化過程として位置付けられうると判断したのである。黒人系ジャマイカ人の Hickling 教授は第三世界のジャマイカの社会文化背景を基盤にこの運動を作成・開拓し葛藤統合の技法にまで改訂したのだったが、これがカナダ等の先進国にも変形を施して適応可能かどうか、実験的研究を散発的に試みている段階に入っていると述べている—インド系シーク教徒でバンクーバー出身の McGill University 社会文化精神医学部門 Jaswant Guzder 教授はこの運動に賛同し、近年継続的にジャマイカに赴いてこのプロジェクトに関わっている。

さて、筆者が実際に研修会形式のワークショップに参加してみた経験を振り返ると、異文化の違いを背景にした感覚経験の位相の違いをある段階で表面化させて参加者に感知させていくやりかたもできるのではないかと感じたのである。ここに、多元感覚人類学的アプローチを組み入れる余地があると思われる。上に述べた Lois D. Frankei (2014) のやりかたの一部を参考にして、PCT にバイパス的付加回路を組み込むことができるかと思われる。

また、デザイン人類学の枠組みを組み入れていくことも可能と思われる。PCT は、集団心理芸術療法を下敷きに行っているため、集団過程の効果は、集団全体がなかば無意識的に、なかば意識的に、その場その場の過程のなかで、集合的アイデンティティを形成していく展開にあるとみられ、また、そこには療法家が触媒ファシリテーター役を果たしながら、潜在的に集合的過程をデザインする行為をおこなっているとみられる。また、筆者が参加した研修会では、楽器を叩き歌唱を演ずるプロの俳優のファシリテーター役の効果が大きかった。PCT におけるファシリテーター役による集合過程のデザインのやり方と効果は経験習得的なものとして了解されており、デザイン行為の絡み合いを焦点化する構想が現在のところ PCT にはみられないのである。もちろん、現地の精神保健運動的な文脈のなかで動いて来てる PCT であるので、デザイン人類学の枠組みを前景化してしまうことによってその文脈からはずれてしまっただけではないわけであるが、研修会としておこなう場合や、カナダに出張して PCT を行うような場合は、より実験的な色彩をもちうるので、その場合には、デザイン人類学の枠組みに連携させた実験的施行を行う意義があると思われる。すくなくとも、PCT をジャマイカの外に普及させていく場合には、デザイン人類学の枠組みと多元感覚人類学の枠組みを連携させて組み込むことにより、PCT のまだ明らかとなっていない潜在的特徴の一部を解き明かす研究に繋がってくるものと思われる。

5. 結語

本研究ノートでは、筆者のこれまでの研究の軌跡のなかで、建築デザインの文化人類学的研究に触れ、また、オーストラリア先住民の絵画やメッセージ・ステックの研究を行っていることを述べた。それらの研究は、デザイン行為過程をとらえるデザイン人類学や多元感覚人類学研究に連携させて、さらに展開可能である点について述べ、既存の研究を参照・論評して振り返り、また、筆者の手掛けているジャマイカの〈心理歴史誌的文化療法〉とその運動の研究にも適用可能である点についても考察を加えた。

デザインの人類学と多元感覚人類学が繋がる新たな人類学的課題の探求の可能性は、今後その範囲が徐々に大きくなっていく情勢にある点を記して、筆を置きたい。

注

- 1) Nold Egenter *Architectural Anthropology: Semantic and Symbolic Architecture. An architectural-ethnological survey into hundred villages of Central Japan*. 1994, Lausanne: Editions Structura Mundi.
- 2) Keith M. Murphy "Design and Anthropology." *Annual Review of Anthropology*, 2016. No.45:433-49.
- 3) Memmott, P. and Keys, C. "Redefining architecture to accommodate cultural difference: designing for cultural sustainability." *Architectural Science Review*, 58 (4), 2015: 278-289.
- 4) 宮坂 敬造「感覚人類学の新たな展開 —多元感覚人類学への道筋拡大 と情報社会の進展への応用可能性—」, 東京通信大学紀要 2号、2020年3月 (2019年度) : 169-185.
- 5) 宮坂敬造「エスノ・アートの交錯再帰的变化とオーストラリア先住民系アートの一局面」, 『慶應義塾大学アートセンター年報』(2006-7年度)、第14号、2007年4月5日、24-31頁。
- 6) "dream time"は、19世紀末期にアランタ族の儀礼をたまたま観察した英国人自然人類学者による誤訳から始まったという説がある—としても、それが今日では、オーストラリア先住民の様々な部族出自の多数派の人々自身がこの〈誤訳〉がもともとの彼らの先祖の観念であったと解釈しているといえる。詳しく調べてみると、調査者をふくむ白人と先住民の人々の相互作用を經由した合作観念ともいえる面があることになるのだが、それと同じような事情が、〈オーストラリア先住民絵画〉の独自と受け取られる構図・デザインの様式の成立にもみられると思われる。
- 7) 山崎正和『装飾とデザイン』中央公論新社、2007年。本書と九鬼周造『いきの構造』の現象学的集合表象論をデザインと感覚人類学と結びつけうる。なお、山崎正和の立論に関連し、Coco Chanelの果たしたファッション革命のことが想起される。産業革命が成熟し、工業社会になる転換点において、有産階級に独占されていた服飾ファッションの世界を、一般市民層までに解放したという役割を、Coco Chanel (ガブリエル・シャネル Gabrielle Chasnel, 1883年～1971年) が担ったのであった。フランスのファッションデザインは、時代の転換期にあった—富裕層向けの黒の色調、礼服的なもの、きらびやかなもの、装飾性の強いもの、というそれまでの時代風潮を刷新した—帽子を、シンプルな形にデザインしたし、男性中心は見られていた機能的な服装をココ・シャネルは女性にも着用可能なものにし、服飾文化を変革したのである。
- 8) 宮坂敬造「トラウマの心象風景と芸術——豪州メルボルン、ダックス・センターでの出会いから」年報 21 2013/2014、慶應義塾大学『アートセンター年報』、第21号、2015年:pp.117-122.; R. H. Mathews "Message-Sticks Used by the Aborigines of Australia." *American Anthropologist*, Vol. 10, No. 9, 1897: 288-298.; Martin Thomas "RH Mathews and anthropological warfare: on writing the biography of a 'self-contained man'." *ABORIGINAL HISTORY VOL 28*, 2004: 1-31.; Piers Kell "Australian message sticks: Old questions, new directions." *Journal of Material Culture*, Vol. 25(2), 2020: 133-152.
- 9) Vilém Flusser & John Cullars "On the Word Design: An Etymological Essay." *Design Issues*, Vol. 11, No. 3, 1995: 50-5.; V. Flusser *Shape of things: A philosophy of design*, Carl Hanser Verlag, 1993.
- 10) K. M. Murphy 前掲, 2016.; A. Prendiville. *A Design Anthropology of Place in Service Design*, 2015: <https://ualresearchonline.arts.ac.uk/id/eprint/8486/>; Gerald Estrin "A methodology for

- design of digital systems.” National Computer Conference, 1978: 313-324.; Gunn, W, Otto, T, & Smith, R. C (eds.) *Design Anthropology: Theory and Practice*. 2013, London: Bloomsbury.
- 11) ソフィー・ウダール、港千尋『小さなリズム—人類学者による「隈研吾」論』加藤・桑田訳、鹿島出版会、2016 年
 - 12) Gatt, C. & Ingold, T. “From description to correspondence: anthropology in real time.” In Gunn, W, Otto, T, & Smith R. C. (eds.) op. cit. 2013.; Marcus, G. E. “Prototyping and Contemporary Anthropological Experiments With Ethnographic Method.” *J. Cult. Econ.* 7(4):399-410.
 - 13) 文化人類学の訓練を受けた調査者が異文化に入った場合、異文化の人々との相互の関わり、相互作用、相互文化解釈という一種の共同作業の過程が大きい点が、スピノザのアフェクタス論とドゥルーズを踏まえたポスト・ブルラリズムで論じられている。西井涼子・箭内匡編『アフェクトゥス（情動）—一生の外側に触れる—』京都大学学術出版会、2020 年
 - 14) Jain, S. S. L. *Injury: The Politics of Product Design and Safety Law in the United States*. Princeton Univ. Press, NJ: Princeton, 2006.
 - 15) “Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses: The Sensory Turn in Anthropology”（多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平）：2011 年 7 月 30 日（土）13:00～17:15：慶應義塾大学三田、東館 6F G-sec Lab: Special Issue: "Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses" Guest Editor: Keizo MIYASAKA, *Ars Vivendi Journal*, No.3 February 21, 2013.; David Howes "Multisensory Anthropology," *Annual Review of Anthropology*, Vol. 48, pp.17～28, 2019.; David Howes "Introduction to Sensory Museology," *The Senses and Society*, Volume 9, Issue 3, 2015:259-267.; David Howes, Eric Clarke, Fiona Macpherson, Beverley Best & Rupert Cox "Sensing art and artifacts: explorations in sensory museology," *The Senses and Society*, 13(3), 2018: 317-334.
 - 16) Sarah Pink "Sensory Digital Ethnography: Re-thinking 'Moving' and the Image." *Visual Studies*, 26(1), 2011.; Sarah Pink "Engaging the Senses in Ethnographic Practice," *The Senses and Society*, 8(3), 2013:261-267.; Ingold, T. *The Perception of the Environment: Essays on livelihood, Dwelling and Skill*. London: Routledge, 2000, p.251-253.
 - 17) Lois D. Frankei *Sensory Insights for Design: A Sensory Anthropology Approach to Industrial Design Research*. Ph. D Thesis at Concordia University, 2014
 - 18) Frederick W. Hickling, Jaswant Guzder et al., "Psychic Centrality: Reflections on Two Psychohistoriographic Cultural Therapy," *Transcultural Psychiatry* Vol 47(1), 2010: 136-158.; F. W. Hickling. *Psychohistoriography: A Post-Colonial Psychoanalytical and Psychotherapeutic Model*. Carimensa, University of West Indies, 2007. なお、この療法運動の調査にあたって、昨 5 月に亡くなられた Frederick Hickling 医博、マッギル大学医学部 Jaswant Guzder 児童精神医学・精神分析教授、同大学 Institute of Community & Family Psychiatry, Cultural Consultation Unit 研究員 Nicole Dsouza 博士、ジャマイカ・キングストンの地域精神科医 Geoffrey Walcott 医博から、多々研究助言をえたことに感謝を捧げたい。さらに、2019 年度の科研費出張期間の 9 月～10 月、Division of Social and Transcultural Psychiatry, McGill University 短期客員研究員として筆者を受け入れてくださり、この研究ノートに関わる研究全般について助言と数々のヒントをいただいた所長 Laurence J. Kirmayer

教授に、深く感謝したい。また、感覚人類学研究に関し、コンコーディア大学社会学・人類学部 Centre for Sensory Studies の D. Howes 教授、Milieux Institute for Arts, Culture and Technology at Concordia University の H. Somak 博士、シンポジウム出席もふくめ面談していただいた同所長の B. Simon 博士に感謝したい。マッギル大学医療社会研究学科名誉教授の医療人類学者 Allan Young 先生にはいつもながらの助言を授けていただいた。

宮坂 敬造（みやさか けいぞう） 東京通信大学 情報マネジメント学部 教授